

漫録

行人漫語

朝霧の内に千代田城の松が美しく浮き出して来る秋の朝、夕やけの色が深いお濠の水に映えてかひつぶり悠々と泳ぐ春の夕、内濠の周圍の道は實に得難き我等の散歩道である。新しい醜い物質文明が日に日に江戸趣味を破壊し去つて行く今の世に深い濠、高い石垣、緑の松、白壁の櫓、見えがくれする青銅の屋根……此處ばかりは、古典的な色調を保存してゐる、詩人大使として我國民に親し味の多い佛國のクローデル大使は殊の外濠端の散歩を好まれてゐる、私はあの冥想に耽りながら緩やかな歩を運ぶ大使の姿を折々此處に見受けることがある。しかし心なき自動車が突如身をかはす隙もなく駆け抜けたら一臺又一臺と砂煙を捲いて驅け交ふ時忽ちにして

彼の美しい詩想は破られてしまふことであらう。

道路は單に經濟的施設としてのみ見るべきものではない。更に市民生活の慰安愉樂の一設備と見なければならぬ、ここに於てか道路美學といふものも存在するわけなのである。諸外國に於ては大都市又は名勝地の存する地域には何れも立派な遊歩道觀光道を設けてゐるが一體東京市内には遊歩道、觀光道どころか歩いて見て不愉快を感じず又不安を感じずすむといふ道路が何處にあるであらうか。せめて此のお濠端の道路には區劃なりとも設けて交通上の脅威から免れて安らかにそゞろ歩きの出来るようにしてほしいものだ、私は考へながら歩いて行くと、ふと社會局の前で道路工事の始めら



れてゐるのに出會つた。日本最初の街並木といふ由緒の深いお濠の柳が掘り倒されてゐる。大きなお濠の石が小さく切り割られてゐる、詩人ならねど私は胸を痛めずには居られなかつた、掘り倒した柳は又植えるのであらう。しかし一度割つて……と思はず付んでゐた私は叱りつけるように鳴つた自動石は復之を如何ともすることが出来ぬ、……ふと私は今朝 車の警笛にハツと驚いて跳び退いた。(十二月三日、論愚生)

防火街路樹

——シイ、白樺を勧む——

都市の街路樹にブラナタス等の外國樹種を用ひて外國の眞似をする事は考へ物で外國人が見ても日本樹種で出来て居る方がよからうと思ふ、朝鮮臺灣を取入れれば日本の樹種は二三千もある、この中から適當な街路樹をえらぶ事は困難でない、特に關東大震災の苦い經驗をなめた今日、街路樹には是非共防火力の強い樹種をえらび度い。

先代萩の劇で有名な原田甲斐も森林保護の上には偉大な功績をのこして居る、仙臺近くの利府村の官林は直徑一尺位の杉が百餘町歩に繁茂して居る大杉林であるが、大きな峰々へはヒノキを三十間幅に植ゑて防火壁にしてあつてこれが原田甲斐の設計を傳へたものとの事である、東京でも數回の大震災大火を味はつた我等の祖先は相當周到の注意を拂つた事は麻布徳川侯邸内三百年を經た防火林、湯島天神のシイの樹、淺草觀音風沙門堂側のシイの樹、同寺の鐘樓を圍むイチョウ等が昨秋の大震災に偉功を奏した事でもわかり、築地本願寺のイチョウの配置も確かに本堂を圍む防火の設計で、神田明神も防火壁として樹を植ゑた周到な設計を、築地本願寺同様後世これを閉却して樹をきり家を建て込めた爲め双方共昨秋の震災に鳥有に歸した、凡そ帝都諸方の防火設備として、樹齡を調べたならば大抵震災後の古人の用意周到な植樹である事が判ると思ふ、即ち五十年乃至五十六年生のシイの澤山ある事は確かに安政度の震災の悲惨を繰返さざらむる我等の祖先の慈悲であらう、シイが昨年の震災の時でも火焰にあほり掛かれた時に反抗して葉から幹から水蒸氣の霧を盛に吹いて猛火を吹き返した壯觀は實に痛快の極であつた、シイは高知市へ今願んでやれば一升三十錢位小包料共六十錢も出せばいくらでも来る、一升は三千粒位あるから若枝を取寄せ一尺位に切り春さし木目には二尺位に育つ、シイに次ぐは白カシも防火力が強い、白カシは房州邊八王子邊の山から若枝を取寄せ一尺位に切り春さし木目には二尺位の外イチに出来る、復興の帝都といはずいづれの都市町村にも街路樹に防火力ある、これ等を採用する事を奨励し度い、また荷揚人足の夏の苦痛河で焼死した彼の如き悲惨を繰返させぬ爲め河畔にも二三間をおいて防火樹を植ゑ度い。防火力ある樹はシイ白カシの外イチョウ、サンゴ樹、モチの木、オガタマの木、イヌノス、シロタモ、サカキ、ヤブニクケイ、ツバキ、山茶花、ヒイラギ、モクセイ、ビソ、山車、カクレミノ、ダラヨウ、イヌツゲ、ツゲ、ナ、メの木、クロガネモチ、クロキ、ヒサカキ、灌木ではアチキ、ヤツテ等種々あるから街路樹の外庭園等にもこれ等の樹を採用すれば萬一の時の用意も兼ねて賢い造庭法であらう。(柳田林業試験所技師談)